

設立にあたって

三ッ谷 洋子

★国際会議がワンステップ

私が男女の肉体的機能と、社会的位置の違いを歴然と感じたのは、やはり自分自身の結婚と出産を通してだった。長い間、男に生まれればよかった、と後悔？しつづけた私が、女としての自分をしぶしぶ認め、開き直ったのも、この経験を通してである。

女、女と肩ひじ張ってヘルメットをかぶる気はないけれど、男女の差は厳然と存在する。なかでも、納得がいけないのは、社会での差別と、機会不均等であった。これを、スポーツの世界からでも少しずつ直していけないだろうかと考え、まず女性スポーツを正しく認識する必要性を感じた。

その最初の社会的アピールは、一昨年（1997年）の第1回国際女性スポーツ会議（10月9日、東京、プレスセンターホール）である。体操のチャスラフスカ、陸上のアシュフォード、テニスのウェードら世界の一流スポーツウーマンを集めた国際会議など、最初は私自身、夢物語だと思っていた。しかし、実際に彼女たちに出演交渉をしていくうちに、何とか実現のメドもたち、運よく私の企画が予想以上に早く日の目を見ることになったのである。私がこの会議でいたかったのは、ファッション的にとらえられがちな女性スポーツを多くの人に正面から真面目に考えてほしい、ということだった。

国際会議は、1つのアドバルーンである。それをフォローするものとして、続いて女性スポーツの勉強会を企画した。たまたま、私自身がスポーツイベントの企画等をするSPORTS 21という会社を作ったこともあって、2回の女性スポーツセミナーを、会社の事業として開催した。しかし、国際会議ほどの派手さもなければ、資金も集まらない。地道にスポーツを考えていくということで、一般の人には馴染みにくいテーマというせいもあってか、2回とも大赤字だった。

★門戸は広く気長に組織づくり

できたばかりの零細企業にとって、スポーツセミナーは荷がかちすぎたのである。しかも、それぞれの専門分野を越えた女性スポーツ関係者の出



会いの場として考えたセミナーは、会が終わればまた次のセミナーが開かれるまでは、存在しないことになる。

こうした理由から、まず、女性スポーツの組織づくりを私の仕事の範疇からはずし、私自身ボランティアとして加われば、無理なく続けられるような気がした。さらに、参加者にとって組織を継続性のあるものにするすることで、より多くの人の声を反映できる。年齢や性別、プロかアマかといったレッテルも抜きにして、女性スポーツの発展を考えたい。ただそれだけで、とにかくスタートすることにした。ターゲットが広すぎる、門戸が広すぎてまとまりがない、という意見もある。が、今、日本に女性スポーツを真剣に取り組む場がなければ、このWSF Japanをその場にしていきたい。ここを踏み台にして、或いは情報交換の場として、多くのものを吸収してもらい、各ジャンルにその成果を持ち帰って活用していただければ、本望と考えている。米国のWSFほどの組織になるかどうかはわからないが、とにかく、誰もやらないから、「とりあえず私がやってみます」というところである。賛否両論、何でも持ちこんで、お互いに勉強の場としていただければ、私の意図は達せられると考えている。そしてもし、このような組織が日本に必要ななければ、自然に消滅していくものであるとも思う。とにかくにも、気長に続けていけば、次第に組織の輪郭もはっきりして、より明確な社会的位置づけができるものと確信している。

しかし、実際の運営が成功するか否かは、資金繰りに大きな比重がかかっていることも否定することはできない。小規模なミーティング一つ開くにも、会場を無料で貸し出してくれるところなど、ありはしない。そういう意味から、「女性」あるいは「スポーツ」に大きな関心を寄せる企業のもの、ぜひお借りしたいものである。